



OCTOBER 2018

 Habitat for Humanity®
Japan

ボランティアを通じて得た、かけがえのないもの

老朽化する施設の修繕を支援させていただいた児童養護施設「星美ホーム」の高校生3名が、今夏ハビタットの海外建築ボランティア「グローバル・ビレッジ・プログラム(GV)」に参加しました。高校生は、ハビタット・ジャパンの学生支部（キャンパスチャプター）として活動する津田塾大学と神田外語大学から集まった大学生8名と合同GVチームを結成し、カンボジアの古都シェムリアップを訪れ、サロムさん親子が安心・安全に暮らせる家を築いてきました。

共に築くGVが必要だった

星美ホームには、幼児から高校生まで、92名の子ども達が暮らしています。そして、子どもたちの健やかな成長を育む一環として、ホームでは毎年夏休みを使ってさまざまな社会研修の機会を子どもたちに提供しているそうです。そこで、今年の夏初めてGVプログラムが研修の一つに選ばれました。実施決定の背景をホームの方に伺うと、施設に暮らす子どもたちにとっては受けとる機会が多いからこそ、GVに参加することで現地の家族と対等な立場で、相手のために行動する経験を培って欲しい、そうした思いから参加を決めたそうです。しかしながらGVはチーム単位で参加するプログラム。ハビタットもホームの思いをくみ取り、高校生3名を含むGVチームを結成するために、キャンパスチャプターメンバーにチームの参加を呼びかけ、初の試みとなる高校生とキャンパスチャプターのメンバーで編成された合同チームが誕生しました。お互いを良く知らないメンバーで構成されたチーム、かつさまざまな事情を抱える高校生を交えるということもあり、チームをどう作り上げるかが当初の課題でした。しかし、それも学びの一つ。学生たちは建築資金を集めるために街頭募金の実施を決め、7月の中旬から14日間連続で新宿駅西口に立ち、共に支援を呼びかけることでチームの結束を強めていきました。

参加したからこそ見た思い

そして迎えた8月3日、ホームの職員とハビタット・スタッフを交えた13名がカンボジアを訪れました。ワークの傍らサロムさん親子の暮らしを垣間見れたことで、日本の暮らしや、自らの育った境遇についても考える機会を得ていたようです。ある高校生は、見聞きする現地の生活と自分の辛い経験とを照らしあわせて、さまざまな気づきを得たそうです。家庭でのネグレクトを経験し、長年劣悪な環境で暮らしたその高校生は、カンボジアでの出会い・経験・時間を通して、自分の将来を考えはじめました。「いつか、自分と同じような経験をしている親子を支援したい」、そんな思いに気づけたのも、GVに参加したからこそ。一人一人がさまざまな気づきからかけがえのないものを持ち帰るGVになりました。

※今夏ハビタット・ジャパンから総勢34チーム、631名がGVに参加。一人一人が新しい気づきを得て無事に帰国しました。





LIXIL と協働で世界の衛生環境を改善しよう！インドとミャンマーにトイレを届けよう

ハビタットは日産自動車株式会社と協働でミャンマーの首都ヤンゴンから北東に 70 キロ離れたバゴーで、住宅の建築支援に取り組んでいます。バゴーは約 110 万世帯が暮らす地方都市です。経済発展が急速に進むミャンマーですが、2014 年に行われた国勢調査によると、バゴーに暮らす世帯の約 11 パーセンにあたる 12 万 1000 世帯は、トイレの備わらない住環境で暮らしているとされています。また、24 パーセントもの世帯が整備されていない井戸をはじめ、河川や池の水を飲み水として使用せざるを得ない状況にあります。住まいは「家」と呼ぶには脆い構造で建てられている上、水害に見舞われやすい地域もあり、安心・安全に暮らすことができる住まいを必要としていました。こうした問題を解消するために、ハビタットはミャンマーでの工場建設を進める日産自動車株式会社による協力のもと、バゴーの村で災害リスクの軽減を考慮した住宅の建築をはじめ、コミュニティ内のトイレや給水施設の設置、衛生教育の実施を通して、コミュニティ全体の住環境の改善に取り組んできました。

そして今秋、新たに日本からバゴーの支援に住宅設備機器最大手の株式会社 LIXIL が加わりました。株式会社 LIXIL は水回り製品を提供する企業として、社会貢献活動の一環として「みんなにトイレをプロジェクト」を立ち上げ、衛生的なトイレにアクセスできる世界の実現を目指しています。この取り組みを推し進める上で、パートナーの一つにハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンが選ばれました。株式会社 LIXIL は、ハビタット・ジャパンを通じて、途上国向けに開発した、虫や悪臭が低減できる構造の「SATO トイレ」をハビタット・ミャンマーと、深刻な屋外排泄の問題に取り組むハビタット・インドに届けます。この 9 月には、6,315 基の SATO トイレがハビタット・ミャンマーを通してバゴーの行政に届けられました。ハビタットでも、トイレを囲む母屋の建築とあわせて SATO トイレの設置に取り組み、健全な住まいの実現を目指していきます。



ハビタットは次世代を担う若者の育成に力を入れています。日本では学生支部（キャンパスチャプター）を設け、大学生によるボランティア活動、啓発活動、募金活動、教育に力を入れ、ボランティアや研修の機会を全国に広げる40キャンパスチャプターのメンバーに提供しています。

社会人から学ぶユースリーダー研修（6月30日）

ゴールドマン・サックスによるご支援のもと、今年で5回目となるユースリーダー研修を開催しました。例年参加者が増えるユースリーダー研修に、今年は全国のキャンパスチャプターから総勢88名もの学生リーダーが集まりました。ワークショップを通して、学生組織をリードする上で欠かせない「マネジメント」の知識、そして活動を向上させていくために取り組むべき「フィードバック」について、ゴールドマン・サックスの社員の方からアドバイスをいただきながら学ぶ一日となりました。



日本とシンガポールのキャンパスチャプターによる国際文化交流研修（8月3日～8日）



今夏、初の試みである国を越えたキャンパスチャプター間のユース研修をハビタット・シンガポールと共同で実施しました。アジア太平洋地域でキャンパスチャプター組織を持つ国は日本をはじめ、シンガポール、韓国など一部の国に限られていますが、ハビタットでは「Habitat Young Leaders Build」キャンペーンを通じ、アジア太平洋全域で若いリーダーの育成に取り組んでいます。

8月3日、全国から集まった総勢20名の学生がシンガポールを訪問。現地の学生と2日間にわたり活動の紹介やワークショップ、また異文化交流の時間をもったほか、ハビタット・シンガポールが取り組む国内居住支援「プロジェクトホームワークス」の活動にボランティアとして参加しました。研修に参加した学生は「シンガポールの学生はとても積極的で、国内のボランティア活動ではあまり普及していないファンドレイジングや、学生がどのようにボランティア活動を運営するかを教えて頂き、日本での活動に取り入れるべきことや改善点を知りました」と話します。双方の学生にとってお互いを刺激する学び多い研修になりました。

全国40キャンパスチャプターが集い、10度目となる全国合同研修を開催（10月6日～7日）

日本全国のキャンパスチャプターを対象に、年に一度の全国合同研修を静岡県御殿場市で開催しました。2009年に開始したこの研修も10回目を迎え、当初100名にも満たない参加者は532名にのぼり、キャンパスチャプターの数は40団体に増え、ハビタットの学生ネットワークの輪が広がっています。東海大学札幌キャンパスから参加した前田和佳奈さんは、「ハビタットの海外建築ボランティアに初めて参加し、帰国後仲間たちと自分の大学にキャンパスチャプターを設立したいと希望し、研修に参加することにしました。全国から集まった学生たちから学びを得てとても刺激になりました。札幌に帰り、いよいよキャンパスチャプターを立ち上げたいと思います！」と語り、仲間に声をかけていました。年に一度、全国から学生が集まり更なる団結をはかる本研修は、ハビタット・ジャパン事務局と全国のキャンパスチャプターに所属する4年生47名により、約2カ月かけて準備が行われました。「全国から集まる皆さんに心から楽しんでもほしい！」「学生生活の忘れられない2日間を！」と連日企画会議が行われ、時には終電近くまで議論が白熱することも。それでも先輩たちは、自分たちが協力する姿こそ、キャンパスチャプターの在り方そのものであり、それを後輩たちに伝えていきたいと、お互いを尊重し協力し合いながら企画を進め、当日を迎えることができました。



広がる国内居住支援活動

国内居住支援活動を開始してから1年が経過しました。新宿区に事務所を置いていることもあり、昨今では新宿区行政機関や福祉事業所、さまざまな支援団体から住環境改善の依頼をいただくことが多くなってきました。それにより、地域の一員、つまり地域の社会資源として密着した活動が行えるようになってきました。例えば、依頼があったその日に徒歩で場所を確認しに行くことができますし、継続的に支援し訪問するという見守り活動がより身軽に行えるようになりました。地域とのつながりを大切にする上で、9月はキャンパスチャプターの協力のもと、新宿区の都立戸山公園で開催された「しんじゅく防災フェスタ2018」や戸山地区で行われた「ニコニコフェスタ」に参加しました。



平時からの地域とのつながりは、災害時には欠かせません。今夏は各地で災害が頻発し、私たちが拠点とする東京にいつ大規模な災害が発生し被災するか分かりません。発災に備え、日頃から地域で助け合いの輪、それぞれ顔の見える関係を築くことは防災・減災につながるだけでなく、「安心・安全に暮らせる住まい」を守ることにつながると考えて活動しています。



Volunteer Story

小田 広希さん | キャンパスチャプター Eddy 所属

今年の夏、キャンパスチャプターの一員として初めて海外建築ボランティアプログラム（GV）に参加した大学1年生の小田さんが、インドネシアGVを通して見つけた「学生がボランティアに取り組む意義」について、思いを話してくれました。小田さんにとって、GVは机上の学び以上に価値のある経験となったそうです。

小田さんが見つけたボランティアの意義は大きく分けて二つあるそうです。その一つは、小田さんのチームが家を建てた家族（ホームオーナー）との会話を通して得ることができたと話します。「大工ではなく学生が家を建てるについてどう考えていますか」その質問に対して、ホームオーナーさんは「家よりも貴重なものをたくさん手に入れることができました」そう答えてくれたそうです。「外国人の文化に触れた経験、言葉の壁を越えて一緒に作業した経験は、大工を雇って家を建てても得られなかった」という言葉から、ボランティアは受益者に何かを送ることだという考え方が一転し、実際は参加者と受益者が互いに学びを与え合うことだということに気づいたそうです。

2つ目の学びは、ハビタット・スタッフとの会話から得たそうです。GVには、各チームにチームを率いるハビタットのコーディネーターがつき、チーム滞在中のワークの同行をはじめ、食事や買い物、文化交流をサポートしてくれます。そのコーディネーターとの会話の中で、「貧困の根本的な原因は十分な教育を受けられないことがある」という話があったそうです。貧しい家庭の子は十分な教育が受けられず、十分な教育を受けていない人は多くのお金を稼

ぐことが難しいために貧しくなってしまい、その子どもも十分な教育が受けられない、という負の連鎖があること、また、この連鎖を自身の力で打ち破るのは難しく、ボランティア活動という形で外部から連鎖を断つ手助けをしなければならないという彼の意見を聞き、ボランティアの必要性、その意義をはっきり感じ取ることができたそうです。GVに参加し、参加者が見る景色、出会う人、感じることは十人十色です。小田さんは、GVプログラムから新たな学びを得たことで、新しい目標を見つけそうです。それは、国内にも国外にも助けを必要としている人々がいて、そういう人々を助ける方法が身近にあるという事実を発信していくこと。「少しでもボランティア参加者が増え、助けられる人が増えれば、こんなに嬉しいことはありません」そう小田さんは話します。

